二　道具と製作技術

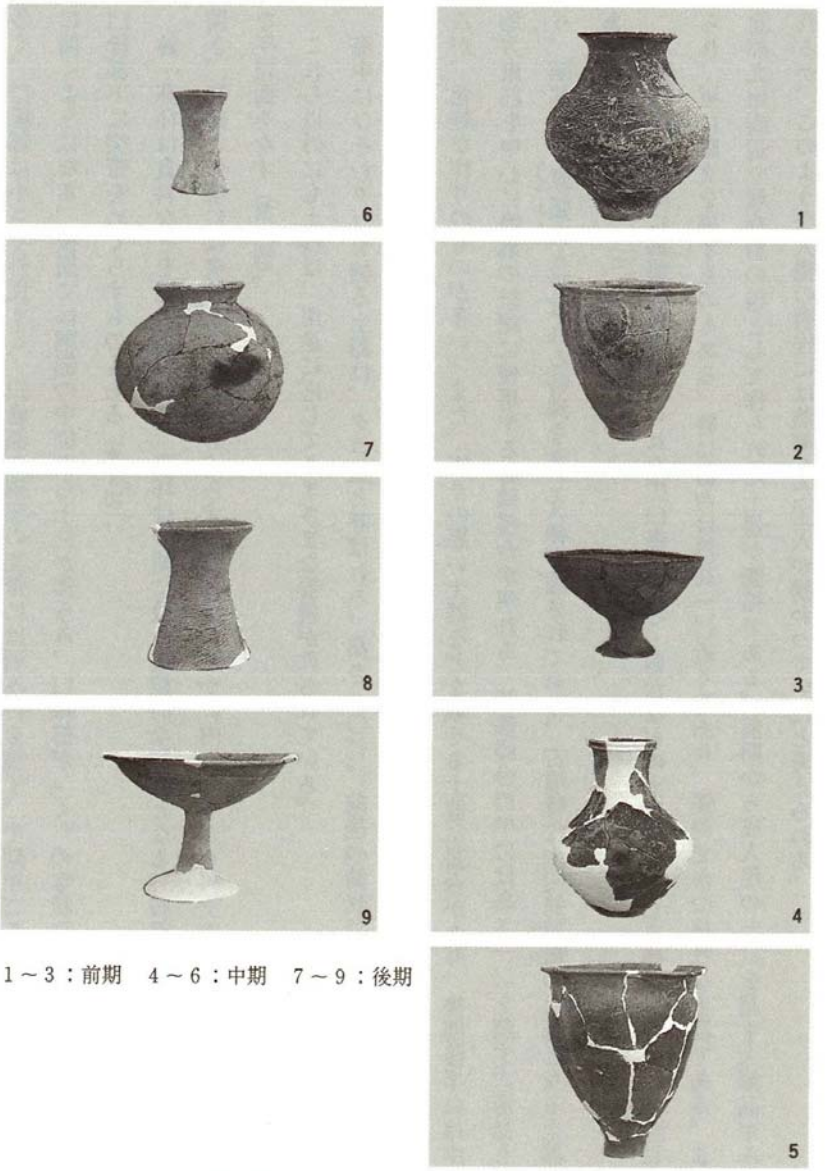
弥生時代には、水稲耕作に直接的・間接的に使用された石器・木製品のほかに、弥生土器や鉄器・青銅器などの新しい道具が生産され、現在の日本文化の基礎となる独特の農耕文化が形成された。

また、弥生時代は紀元前四世紀から紀元後三世紀までの約七〇〇年間続いた時代であるが、その間に使用された道具や生活・文化の変化から、前期・中期・後期の三時期に大別されている。

弥生土器　明治十七年（一八八四）東京都文京区弥生町で、従来の縄文土器とは違う赤焼きの土器が見つかった。この出土地の名称から弥生土器の名称ができた。弥生時代の土器は、壺・甕・高坏・鉢の四種類が基本的なセットとなっている。

壺は貯蔵に使用され、器形も無頸壺・長頸壺・広口壺・蓋付き壺・台付き壺・瓢形壺などさまざまであり、豊富な文様で飾られることが多い。北部九州の前期の土器は板付式と総称され、壺は胴部の上位が膨らみ、その肩部に文様を施す。頸部はしだいに細くなり、口縁部が小さく外反する。中期の代表的な土器である須玖式土器では、各器種とも実用性に富んだ精巧な器形となる。壺は文様がなくなり、頸部が大きく外反し、口縁部が水平に開く。後期になると頸部の外反は小さくなり、口縁部は直立し波状文などを施す。終末期では底部が平底から丸底に変化する（第3図）。

甕は食料の煮炊きに使われる。北部九州の前期の甕は、胴部上位に突帯や沈線・段などをめぐらすものが



1～3：前期　4～6：中期　7～9：後期

第３図　北部九州の弥生時代の土器

多く、口縁部は小さく外反する。口縁部や胴部の突帯には刻み目を施す。中期中ごろになると口縁部が水平に開くようになる。後期では胴部の中位から上位が膨らみ、口縁部が「く」の字状に外反する。胴部中位や口縁部下に突帯をめぐらすものもある（第3図）。

鉢・高坏は食料などを盛る器である。高坏は中期に最も機能的な製品となる。脚部が長く、下端が大きく開き、杯部との境には突帯または段をめぐらす。杯部はわずかに内湾しながら外上方に延び、口縁部が水平な平坦面をなす（第3図）。

これら以外にも土器は、用途に応じてさまざまな器種が作られている。

海中にひそむタコを捕る土器は、タコ壺と呼ばれる。高さ一〇センチメートル前後の筒状で丸底をなし、胴部上位にはひもを通す孔がある。塩を作る際に使用する製塩土器は、時期や地域の違いによって器形も異なっているが、粗雑な作りのものが多い。また、座りの悪い土器などを載せる土器台があり、後期後半には中国地方東部を中心に墳墓の祭祀に使用する特殊器台が現れる。特殊器台の中には高さ一メートルを超す大形品もあり、胴部には直弧文（ちょっこもん）と呼ばれる特殊な透し文様が施されており、古墳時代の円筒埴輪（はにわ）の祖形となる土器である。

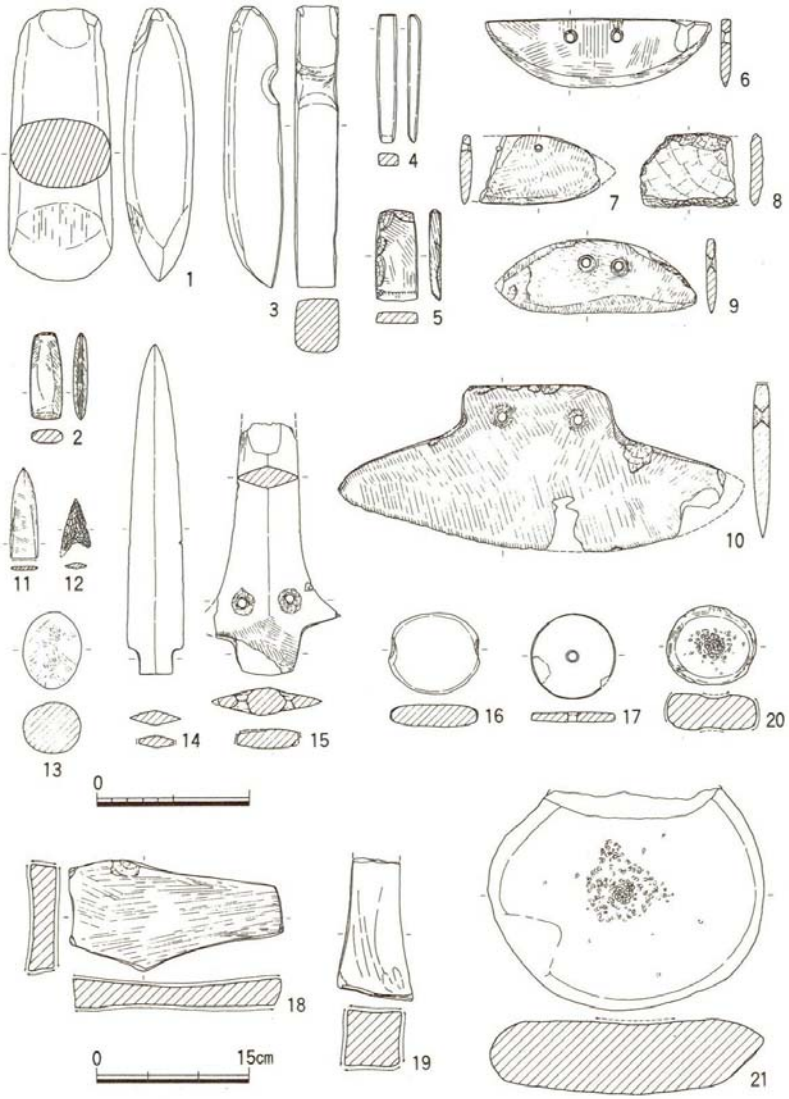
北部九州で中期に墓前祭祀用に作られた広口壺・高坏・器台などの土器は、美しく磨かれたのち赤色に塗られ、更に暗文を施すものもある。特に器台は器高一メートル近くもあり、優美でかつ勇壮な土器である。また、北部九州周辺で埋葬用の棺として作られた土器が甕棺である。前期から成人用の一メートルを超す大形品がみられるが、このような大甕の製作には熟練した工人が携わっていたと考えられる。

石器

弥生時代の石器には、水稲農耕に伴って新しく伝来してきた太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石庖丁・石剣などの大陸系磨製石器と、それ以前の打製石鏃・磨製石斧・磨石などの縄文系の石器とがあり、金属器の普及に伴いそれを模倣して作られた石器もある（第4図参照）。

太形蛤刃石斧（1）は、伐採用の石斧で、住居や農具・灌漑用材など多量の木材の生産に必要な石器であった。前期末以降、太く大形のものが増加し、福岡市今山遺跡産出の玄武岩を用いた石斧は、長さ二〇センチメートル以上、重さが一・五～二キログラムもある。縄文系の磨製石斧は結晶片岩や蛇紋岩などの石材を使用し、薄手で、やや小形のものが多い。扁平片刃石斧（5）は木材の加工用具で、長さ五～六センチメートル、幅三～四センチメートルで、厚さ一センチメートル前後の縦長板状の石斧である。短辺の一つを片側から研ぎだして刃部を作る。柱状片刃石斧（3・4）も加工用具であるが、断面が方形ないし台形をなす棒状の石斧で、一端にノミ状の刃部がついている。長さ一五～二〇センチメートルの大形品が多く、基部近くにひもで柄に固定するための抉りがある。

石庖丁は稲の穂を摘む収穫用具で、初期には朝鮮系のものに類似した外湾刃半月形（6）が西日本各地で使用されたが、中期になると瀬戸内東部ではサヌカイト製で方形の打製石庖丁（8）が製作され、畿内では結晶片岩製の直線刃半月形（9）が増加するなど、石材や形態に地域性が顕著になる。北部九州では福岡県飯塚市の立岩遺跡周辺で、赤紫色の輝緑凝灰岩や粘板岩を使用した外湾刃半月形のものが製作されている。同様の石材はこの地域から下関市にかけて分布する脇野亜層群の地層から産出し、北部九州の他の地域でも石庖丁などの石器が作られたようだ。また、長さ二〇～三〇センチメートルの大形石庖丁と呼ばれる一群の石器（10）は、用途が不明である。収穫用の石器では、ほかに石鎌がある。石鎌は方形ないしやや弧を描く形態をなし、



第4図　弥生時代の石器

一辺に刃部を持つ。華北や朝鮮半島北部では、粟・稗などの雑穀の収穫用具として使用されている。

石鏃は、縄文時代以来の黒曜石や安山岩系の石材を利用した打製石鏃（12）に加えて、粘板岩や砂岩系の石材を素材とした磨製石鏃（11）が新しく作られる。縄文時代では狩猟用具として使用されていたが、弥生時代ではしばしば武器として使用されている。石鏃以外の狩猟用具または武器としては、投弾がある（13）。長さ四～六センチメートル程度の球形ないし紡錘形の形態をなし、帯状または棒状の器具を使用して投げる弾である。そのほかの武器用の石器としては、石剣・石戈がある。石剣は前期には銅剣を模倣した有柄式磨製石剣が少数みられるが、一般的には別の柄に装着するための茎を持つ磨製石剣が多い（14）。石戈は主軸が柄に対して直交または斜交する磨製の武器である（15）。

石錘は漁網のおもりで、縄文時代から使用され、弥生時代でも土製品とともに使用されている（16）。紡錘車は糸を紡ぐ際に撚りをかける紡錘につけられた円板形の石製品である（17）。

磨石・敲石は主にほかの道具の製作や調整のほかに、食料の調理に使用されていた（20）。台石・石皿は作業台や調理台が主な用途である（21）。

砥石は、金属器や磨製石器などの道具が日常的になり、需要が増加した。一定の場所に置いて使用する大形品と、携帯して使用する小形品があり、更にキメの粗いものや細かいものなど用途に応じたさまざまな種類がみられる（18・19）。

青銅器

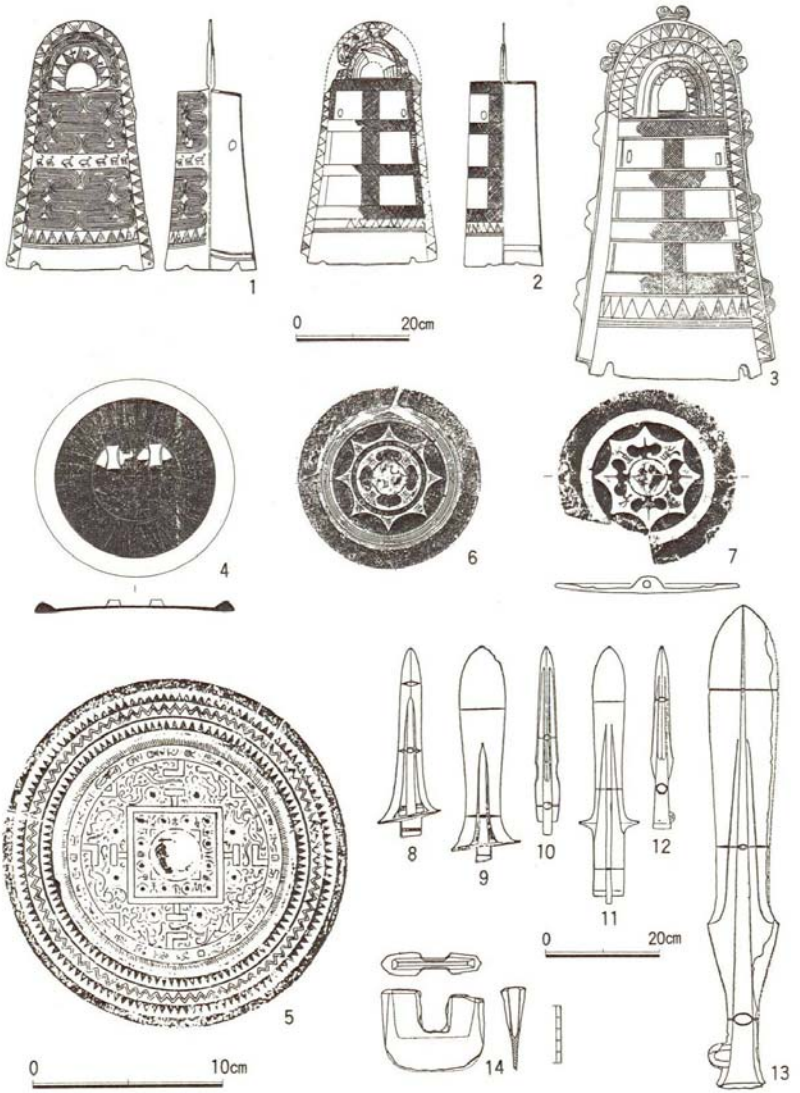
東アジアでは中国の殷・西周において鼎・鬲などの青銅器の礼器が製作されている。日本では弥生時代前期初めの福岡県今川遺跡から銅鏃と銅鑿が出土しているが、多数発見される

のは前期末以降である。弥生時代を通じて青銅器は武器や祭器として使用される例が多い（第5図参照）。

銅剣・銅矛・銅戈（8～13）は、前期末から中期初頭には細身（細形）のものが多く実用の武器として使用され、墓地から人骨に刺さった切っ先が出土する例もある。また、これらの青銅器は福岡県志賀島や佐賀県惣座遺跡などから鋳型が出土しており、一部は北部九州を中心とした国内で生産されていた。中期前半には身の長さと幅が大きく、厚さが薄い中細形が現れ、実用的な武器から祭器へと用途が変化する。この段階には刃つけがしだいに不十分になり、瀬戸内周辺の銅剣や大阪湾型銅戈に装飾文様がみられる。武器形青銅祭器は中期後半になると中広形になる。ただし、九州では銅矛・銅戈が主流で、瀬戸内では銅矛と平形銅剣、山陰では銅矛が発見されている。後期では武器形青銅祭器は北部九州の広形銅矛と瀬戸内の平形銅剣に限られ、畿内以東では消滅する。島根県荒神谷遺跡では銅剣三五八本・銅矛一六本・銅鐸六個が一括して埋納されていた。

銅鐸（1～3）は朝鮮の小銅鐸にその原形があり、前期末から中期にかけて北部九州に移入されたと考えられている。畿内では中期以降銅鐸が青銅祭祀の中心となる。形態は中期には菱環紐式・外縁付き紐式・扁平紐式などと呼ばれる「聞く」銅鐸であるが、後期にかけて大形化し「見る」銅鐸へと変化する。

銅鏡（4～7）は前期末から中期前半に中国製の多紐細文鏡が移入され、中期後半では中国の前漢鏡がみられ、前原市三雲南小路遺跡の甕棺墓からは内行花文鏡・清白鏡などの銅鏡が三五面出土している。後期初頭になると方格規矩鏡に代表される後漢鏡が中心となり、福岡県井原鑓溝遺跡からは一八面が出土している。その後、後期前半から古墳時代にかけて後漢鏡に加えて国産の小型仿製鏡が現れる。



第5図　弥生時代の青銅器

1～3　銅鐸　4～7　銅鏡　8・9　銅戈　10・11　銅剣
12・13　銅鉾　14　青銅製鋤先

鉄器

青銅器とともに弥生時代の主要な道具に鉄器が使用されている。鉄器の場合、青銅器のように祭祀用具としてではなく、武器や農具・工具として使用される場合が多い（第6図参照）。鉄製の武器には鉄剣・鉄戈・鉄矛（1・2・5）があり、ほかにも鉄鏃・鉄鏃（3・6）などがある。また、後期を中心に刀が現れ、柄の端に円環をつける素環頭のもの（4）もある。

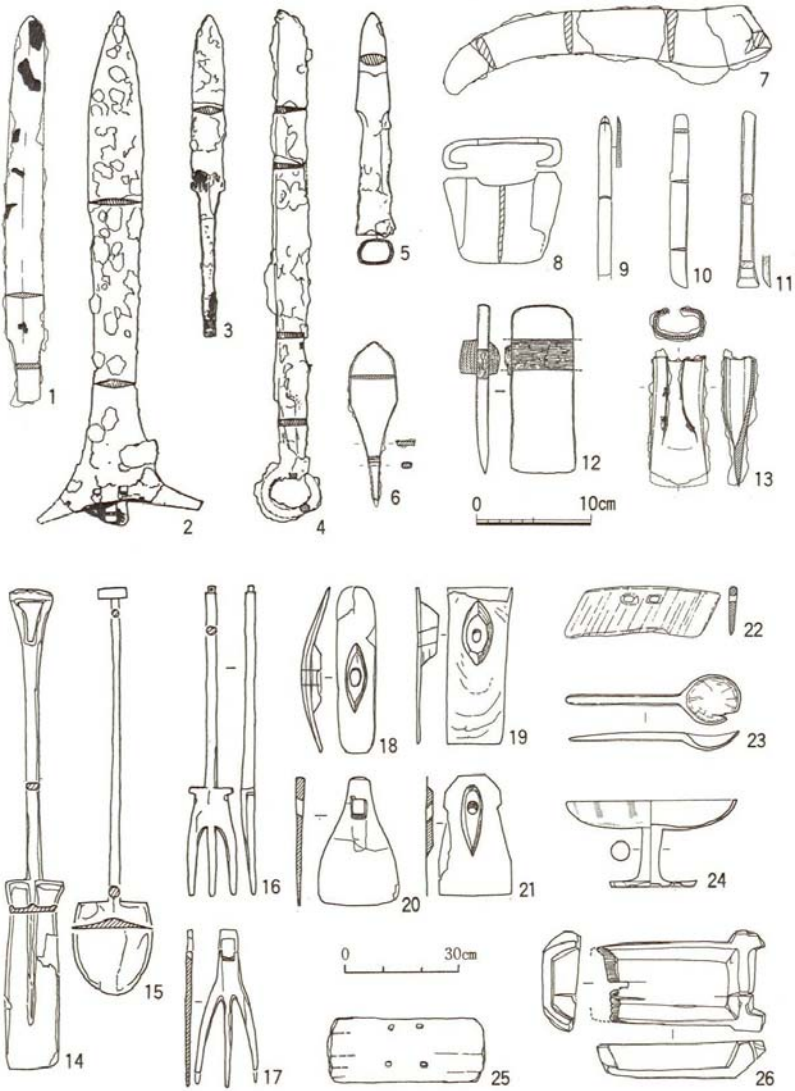
農具の鉄器化は中期後半から後期にかけて進行する。石鎌が鉄鎌（7）に、石庖丁が鉄製手鎌に変化し、木製の鋤や鍬などの農具の刃先に鉄刃（8）をはめこんで使用するようになる。

工具では鉄斧（12・13）が前期末から使用され、後期には各種の磨製石斧は消滅する。鉄斧は全体が板状のもの（12）と、柄に装着する部分が袋状のもの（13）とがある。木材の加工用工具ではほかに鉋・刀子（ナイフ）・鑿などの鉄製品（10・11）がある。これら以外にも、釣針などの漁労具に鉄製品がある。

木製品

木製農耕具（第6図参照）のうち、鋤（14～16）は長い柄の先端に一直線に刃がつくスコップ状の形態をなす。鍬（17～21）は柄に対して直交または斜交する方向に刃がつくもので、現在の鍬とほぼ同じ形態である。刃先は二またや三またに分かれるものがある。素材となる樹種は、アカガシ・アラカシ・イチイカシなどである。後期になると田の表面を平らに整えるえぶりや深田へ堆肥を踏み込むための大足、深田のなかを歩くための田下駄（25）が登場する。

また、竪杵や臼も木製品があり、石斧や鉄斧の柄にも硬くかつ弾力性に富むアラカシ属が使用されている。木工用轆轤により鉢や椀、高坏（24）などの容器類の製作が容易になり、材料にはケヤキ・サクラ・ヒノキなどが使用されている。



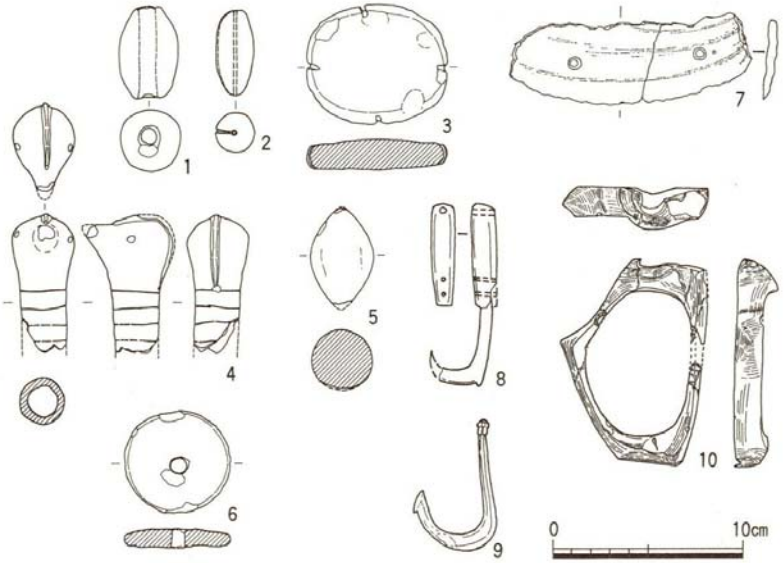
第６図　弥生時代の鉄器と木製品

短甲や弓・剣の把頭などの武器にも漆（うるし）を塗って仕上げた木製品がある。

その他の道具

これら以外に土製品・貝製品・骨角製品などさまざまな素材を利用した道具がみられる（第7図参照）。土製品には漁網のおもりである土錘（1～3）や、狩猟用具または武器である投弾（5）のほかに、紡錘車（6）も土製品がある。東日本の円板形土製品や中国・四国地方の分銅形土製品は護符のような用途が考えられている。また、祭祀に使用されたと推定される動物をかたどった土製品（4）などもある。

貝製品は腕輪など装身具に多くみられるが、アワビなどを貝庖丁（7）として使用する場合がある。骨角製品としては、釣針（8・9）や銛（もり）・ヤスなどの漁労具のほか狩猟用具の骨鏃などがある。



第7図　弥生時代の各種道具と装身具

衣服と装身具

三世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』には、弥生時代後期の女性の衣服は貫頭衣、男性は横幅衣と記録されており、日常着用していた衣服の手がかりとなっている。また、魏との交易品には「倭錦」・「異文雑錦」などの繊維製品があり、紡錘が遺跡からしばしば出土することと併せて、ある程度の機織の技術が存在したことを示している。衣服の素材は、北部九州では蚕の繭から採った絹がわずかにあるが、大部分はタイマ・カラムシ・アカソなどの草皮や、コウゾ・カジノキ・フジ・シナなどの樹皮から採った植物繊維であったと推定されている。衣服の素材となる布は、縄文時代晩期の段階で編布に加えて織布が作られ始めるが、弥生時代になるとしだいに織布の生産が盛んになる。

装身具のうち頭部に装着するものは、木や骨で作った竪櫛や簪などの挿物系統と、木製ヘアバンドや玉類を連ねた結束物系統とがある。また、飯塚市立岩遺跡では多数の管玉や勾玉を連ねた髪飾りが出土している（第8図参照）。

首飾りにも管玉・勾玉や小玉などを組み合わせて使用するが、これらの玉類の素材は硬玉・碧玉・貝・牙などのほかに、新しくガラスが使用されるようになった。腕輪では、縄文時代に木製・牙製・二枚貝製などがあったが、弥生時代には南海産巻貝（第7図10）・青銅・金

第8図　飯塚市立岩遺跡出土の髪飾りを装着した女性（想像図）

銅・鉄・ガラスなどの製品が加わる。また、銀製・青銅製・貝製・鹿角製などの指輪や、木製の履も発見されている。

中国からもたらされた権力の象徴となる道具としては、天明四年（一七八四）福岡県志賀島で発見された「漢委奴国王」銘の金印が、紀元五七年に後漢の光武帝から奴国王に与えられたものとされている。また、福岡県前原市三雲南小路遺跡から出土したガラス製の璧も中国では一定の身分の象徴である。

三　集落と墓地

弥生時代には水稲耕作を生活の基盤としていたことから、沖積平野や河川の後背湿地などの農業用水の得やすい場所は水田に利用された。このため、集落は水田の周辺の微高地や低丘陵に広がる場合が一般的である。また、墓地も、集落に近い同様の地形上に営まれることが多かった。

住居

一般的な住居は竪穴住居で、床面の形は全国的に前期・中期には円形のものが多く、後期になると大部分が方形になる。住居内の中央部には炉が作られ、柱は床面が円形の場合には円形に一〇本程度めぐらされ、方形住居では炉を挟んで二本、または方形に四本以上配置される。屋根は切妻造りか円形に近い寄棟造り、あるいは原始的な入母屋造りなど各種あり、茅葺きのものが多い。

また、掘立柱建物も一般の住居として使用され、湿気の多い土地や作業小屋などに多くみられたが、しだいに神聖な空間、特別の人々の住居となっていった。